

# 四日市 歴史探訪

四日市市は、積卸港(空港除く)別貿易額全国九位(平成二十三年)の四日市港を有し、製造品出荷額も全国十一位(同二十二年)の産業都市として発展してきました。そんな四日市市の歴史を皆さんはどれくらいご存じですか？  
今回は、四日市市の歴史にスポットを当て、本市がどのような歩みを経て発展し、日本の近代化に貢献してきたのかを紹介いたします。



たわらのとうたひでさと  
浜田城主田原家の遠祖、俵藤太秀郷に  
ゆかりのものといわれる兜鉢  
(国の重要文化財、鵜森神社蔵)

## ■ 歴史と遺跡のまち 前方後円墳など 約580もの遺跡

三重県の北部に位置する本市は、西は鈴鹿山脈、東は伊勢湾に面した自然豊かで温暖な気候に恵まれており、旧石器時代から既に人々が住み、江戸時代までの遺跡が約580カ所確認されています。

羽津地区にある志氏神社からは、4世紀ごろの前方後円墳も見つかっており、また、

### 「日本書紀」と四日市

「日本書紀」には、672(天武天皇)年6月に勃発した「壬申の乱」の際に、大海人皇子が大和の吉野を逃れ、東へ向かう途中の、6月26日朝(午前10時ごろ)に朝明郡迹太川のほとりで、天照大神を拝し、戦勝祈願をしたと記されており、大矢知町にある御遥拝所跡がその場所とされています。この後、皇子は大友皇子の近江朝廷軍を破り、飛鳥浄御原宮で即位して天武天皇となりました。



また、平安時代初期に編さんされた『続日本紀』によると、740(天平12)年には、後に奈良の大仏を造立した聖武天皇が伊勢に行幸し、その際、朝明郡衙(朝明郡の役所)に2泊したとあり、久留倍官衙遺跡との関連が注目されています。

天武天皇ゆかりの御遥拝所跡(大矢知町)

2006(平成18)年7月28日に市として初めて国史跡の指定を受けた久留倍官衙遺跡(大矢知町)は奈良時代の朝明郡の役所跡で全国的にも貴重なものです。

## ■ 四日市の由来 室町時代から 「4」の日の定期市

室町時代の1470(文明2)年に現在の鵜の森公園に田原美作守忠秀が浜田城を築いた時に、領内の農業や手工業を盛んにし、商品の流通を図るため、それまで、城の西を南北に走っていた東海道を城の東に移して、交通の便を良くするとともに、そ

### 「古事記」でみる四日市

「古事記」によると、倭建命が東国征討の帰途に立ち寄った伊吹山で病に倒れ、故郷の大和に帰ろうとして伊勢国に入り、四日市の采女にある急坂を腰の剣を杖にして登ったとあります。これが、「杖衝坂」の名前の由来と伝承されています。

また、この時に「わが足三重の勾りなして、いと疲れたり(自分の足が三重にも曲がって大変疲れたことだ)」と語ったことからこの地が三重と呼ばれるようになりました。



杖衝坂(采女町)

# 太古から息吹く 繁栄の歩み

の北寄りに十字の大道を作り、市場を形成し、市場村と称しました。1473(文明5)年の外宮庁宣案(※1)には「四ヶ市庭浦」の地名が出てきており、このころから既に定期市が開かれていたことが伺えます。その後、室町時代後期には市場も整い、四日市と称して毎月4日・14日・24日の3回定期市場が始まり、これが四日市の名の起こりと言われています。

こうした四日市場の発展には、海陸両路の交通の便が良いなど、四日市の地の利が大きく影響していると考えられます。

(※1) 1473(文明5)年に禰宜度会神主から神宮の御用船の警固役(一種の通行税)取り立ててに関して出された通知文書の控え

## 江戸幕府と四日市 幕府の直轄領に

「本能寺の変」の時に、和泉国(大阪府)の堺にいた徳川家康が、伊賀を越え、三河国(愛知県)に帰るためにたどりついたところが四日市の浜辺だといわれています。

そこに架かる橋の上で家康が、海路にするか陸路にするか考えを巡らせていたところ、四日市の町人の協力を受け、海を船で渡ることができたので、その橋を「思案橋」と呼ぶようになりました。



1603(慶長8) 思案橋(浜町)

年、江戸幕府の開府とともに、四日市は幕府の経済的基盤をなす直轄領(天領)となりました。幕府はこの天領に代官を配置し、支配を行わせました。代官がその支配地の行政と司法を行う役所を陣屋といい四日市にも、現在の中部西小学校の地に建てられました。

## 江戸時代の経済 交通の要地、 商工業が経済の中心に

1601(慶長6)年には東海道の宿場町に指定されたため、沿道には旅籠などの商家も現れ、それまで盛んであった、農業・漁業に加え、商工業が経済の中心を担っていくこととなりました。

こうした江戸時代の産業の中では製油業が、代表として挙げられます。四日市の菜種油は“伊勢水”と呼ばれて重宝され、四日市港から江戸に向けて盛んに積み出され、明治期には全国屈指の植物油生産地となりました。

また、徳川家康が4度にわたり渡海したこともあり陸路だけでなく海路においても交通の要衝となりました。

このように、四日市は陸路と海路がつながる交通の要衝として、港の廻船による人と物資の集散、宿場町の発展による商品経済の拡大が進み、多くの人や物が交流するにぎわいのある町として発展していきました。

四日市の歴史	
旧石器時代	山田町や美里町で小規模な集団生活が営まれる ・宮蔵遺跡(山田町) ・内戸谷B遺跡(美里町)
縄文時代	BC6000 堂ヶ山町で集団生活が始まる(一色山遺跡)
弥生時代	BC300 生桑町に集落が形成される(大谷遺跡) 200 伊坂町に集落が形成される(西ヶ広遺跡)
古墳時代	300 大宮町に前方後円墳が築造される(志氏神社古墳)
飛鳥時代	
奈良時代	朝明郡衙が設置される(久留宿官衙遺跡)
平安時代	800 西日野町に五位鳥山西明寺を創建(のちの伊勢安国寺) 929 垂坂町に慈恵大師が観音寺を創建
鎌倉時代	
室町時代	1394 赤堀肥前守景信、上野国赤堀庄から伊勢国栗原に移り築城、地名を赤堀と改称 1398 赤堀盛宗、羽津城を築く 1470 田原美作守忠秀浜田城を築く 1473 外宮庁宣案に「四ヶ市庭浦」の記述
安土・徳川時代	
江戸時代	1601 四日市、東海道の宿駅となる

弥生時代の製造と考えられる  
へんべいしゅうりょうくは きたすきもんどうたく  
扁平鈕式六区袈裟禪文銅鐸  
(三重県指定有形文化財)  
うながみみとし  
菟上耳利神社蔵、伊坂町)

志氏神社古墳  
(大宮町)



江戸時代の東海道の風景  
[広重作、「狂歌入り東海道 富田立場之図」(博物館蔵)]



# 産業が支えた 近代化への歩み



明治時代、四日市町を管轄した  
当時の戸長役場(中部)  
〔「目で見る四日市の100年」より〕

## ■ 四日市町から四日市市へ 明治30年、 全国で45番目の市に

明治に入り、1889(明治22)年4月1日、四日市は、浜田村、浜一色村の二村を編入し、町制を施行し、四日市町となり港を中心に発展していきました。

その後、年々人口も増加し、町民の間にも市制実施を求める声が高まり、1897(明治30)年5月に県知事に対し、市制実施の申請をし、同年8月1日、全国で45番目の市となりました。

## ■ 商業から工業へ 紡績、製油、製陶などが 盛んな工業都市に

明治時代に入ると、経済の中心は次第に工業へと移っていきました。中でも、近代工業の代表の1つである紡績業では、明治新政府の紡績奨励に応じた「十基紡(※2)」の一つである三重紡績所の創業者である伊藤伝七が、「実業王」渋沢栄一らの援助を受けて1886(明治19)年7月に、三重紡績株式会社を創立し、2年後に四日市浜町に本社・工場がほぼ完成し、本格的

な操業を開始しました。業務成績が上がると、各地の紡績会社との合併も進み、1914(大正3)年6月には大阪紡績株式会社と合併して東洋紡績株式会社となりました。

また、1886(明治19)年には、渋沢栄一の出資を得た四日市工業株式会社がイギリスから絞油機械を導入し、日本初の機械製油によりごま油の生産を始めるなど、機械力を応用した近代的会社経営への転換が開始されました。

このころから、製糸業、漁網工業も同様に近代化を進め、輸出産業の代表へと成長していきました。

また、地場産業である四日市萬古焼は1870(明治3)年に、末永で山中忠左衛門が窯を築いて量産を開始、翌年には堀友直が三ツ谷町に窯を開き、1875(明治8)年には薬の行商人であった川村又助が、萬古陶器問屋を開業して販路開拓に尽力、これらの努力により多くの人々が製陶業を営むようになりました。堀友直と川村又助は、1877(明治10)年の第1回内国勸業博覧会や、翌年のパリ万国大博覧会などに出品し、萬古焼の声価を国内外に高めました。

(※2) 政府の工業奨励策の1つで、イギリスより購入した精紡機10セットの払い下げを受けて新たに設立された10カ所の紡績所

## ■ 四日市港のさらなる発展 伊勢湾最大の商業港として 発展、貿易も盛んに

市場のある町、宿場町として発展していくに伴い、「十里の渡し(※3)」(四日市-熱田宮間)の評価は次第に高まっていきました。水深の深さと波静かな入り江は天然の

### 日本航空界の草分け 玉井兄弟

市内浜田に生まれた玉井兄弟は、飛行機図解という本を購入し、飛行機制作に熱中し、ライト兄弟が初飛行に成功した9年後の1912(明治45)年、築港埋立地で滑走実験を行いました。その後、兄清太郎は、1916(大正5)年10月、東京羽田に日本飛行学校を創立し、自ら教官となり練習生の養成に当たりました。清太郎は墜落事故で亡くなりますが、日本飛行学校は後に羽田飛行場(現在の東京国際空港)になりました。

1919(大正8)年10月9日、玉井藤一郎が兄清太郎の遺志をつぎ、自ら製作した「青鳥号」を操縦し、市内上空で25分間の飛行を成功させました。



明治23年当時の  
三重紡績(浜町)

良港となり、幕末から明治にかけては伊勢湾最大の商業港として発展し、1870(明治3)年の回漕会社による四日市-東京間の航路開設以降、四日市港を經由する貨客が増加しました。しかし、当時の四日市港は安政の大地震などによる堤防決壊のため、港口が流砂にふさがれるようになり、干潮時には小舟の出入りさえ困難な状態になっていました。この光景を見た廻船問屋の稲葉三右衛門は「四日市の生命は港にある」として、私財を投じて四日市港を築造(1884(明治17)年完成)。さらに、近代港への修築を進め、四日市港は物資の集積地として、外国貿易も活発化していきました。そして、1899(明治32)年8月、正式に開港場に指定され、文字通り国際貿易港としての第一歩をしるすことになりました。

その後も、紡績産業の隆盛とともに、綿花・羊毛の輸入港として栄え、1952(昭和27)年には、特定重要港湾にも、指定されました。

(※3) 桑名宿と宮宿を結ぶ七里の渡しに対し、四日市宿と宮宿を結んでいた渡しのこと。江戸時代中期から次第に利用客が増えていき、徳川家康が江戸と上方を往復する際にもこの航路を使用したことが記録されている

## 戦後の工業の躍進

### 国を担う産業とともに発展

第一次世界大戦終了後、市内の工業は、生糸などの紡績、製茶、製網、製陶など輸出に関連した業種が目覚ましい発展を遂げました。特に、陶磁器工業は水谷寅次郎が石炭窯による大正焼の生産に成功したのを契機に、それまでの登窯から燃料費が節約できる石炭窯に次々と切り替えられただけでなく、成型工程でも機械化が図ら

れて、室内装飾品や食器類が大量に輸出されることとなりました。

その後、臨海部では第二海軍燃料廠の建設を皮切りに、大協石油や浦賀船渠・富士電機・陸軍製絨廠などが立地し、急速に軍需工業地帯化していき、東洋紡績などの繊維産業も軍需転換を強いられることとなりました。

第二次世界大戦終了後、国は「石油化学工業の育成対策」を掲げ、その一つとして、1955(昭和30)年に、塩浜区内にある、第二海軍燃料廠跡地への石油化学コンビナートの建設を決定し、昭和四日市石油、三菱油化、日本合成ゴム、松下電工などが相次いで建設され、日本屈指の石油化学コンビナートが形成されることとなりました。

しかし、1959(昭和34)年の第1コンビナート稼働直後から、大気汚染が大きな問題となり、多くの人が「ぜんそく」などの呼吸器の病気で苦しむこととなりました。

その後、本市では、市民・企業・行政が一体となって環境改善のまちづくりに取り組み、また、コンビナートも時代の移り変わりとともに大きく転換し、今は自動車や電子・電機などの製品に欠かせない最先端の高度部材の生産基地となっています。

### 陸上交通網の発達

1888(明治21)年に、日本近代郵便の父である前島密を社長として浜田に関西鉄道株式会社が設立され、亀山を經由して草津や名古屋、奈良を結ぶ鉄道の整備が進められました。さらに他の鉄道会社を買収し、名古屋・湊町(大阪市)間での直通列車が走るようになりました。その後、鉄道国有法により1907(明治40)年に関西本線になりました。

## 四日市の歴史

### 明治時代

1873  
稲葉三右衛門ら四日市港築造工事に着手(1884年完成)



明治19年、稲葉町の突堤に設置された最初の灯台(現在のものは戦後につくられたもの)

1888  
関西鉄道株式会社設立

1889  
町制施行(四日市、浜田、浜一色合併、当時の人口15,483人)

1894  
四日市港波止場(潮吹き防波堤)改築工事竣工

1897  
市制施行(45番目の都市、当時の人口は25,326人)

1899  
8月 四日市港、開港場に指定される

### 大正時代

1914  
6月 三重紡績と大阪紡績合併し、東洋紡績を設立、本社を浜町におく

### 昭和時代

1931  
12月 四日市港駅鉄道橋(現末広橋梁)竣工

1936  
3月~6月 国産振興四日市大博覧会を千歳町で開催

1938  
6月 名古屋~四日市~大阪に電車開通(現近鉄)

1945  
6月 空襲により市街地壊滅

1952  
2月 四日市港、特定重要港湾に指定される

1959  
9月 伊勢湾台風襲来(死者115人)

1963  
10月 米国ロングビーチ市と姉妹都市提携

1968  
10月 四日市港、豪州シドニー港と姉妹港提携

1972  
7月 四日市公害裁判に判決

1980  
10月 中国天津市と友好都市提携

### 平成時代

2005  
2月 四日市市と楠町が合併

2008  
4月 県内初の保健所政令市へ移行



# 四日市の歴史探索

## お諏訪おどり

### 1 [市指定無形民俗文化財]

干害に苦しむ水沢町の庄屋で瀬戸用水の完成に尽力した辻久善への「お礼踊り」として、1720(享保5)年に奉納したのが始まりです。現在では、7月31日の足見田神社の水まつりの一部として行われています。



### 2 浜田城跡(鶴の森公園)[市指定記念物(史跡)]

室町時代末の1470(文明2)年に田原美作守忠秀が築城。現在は、鶴森神社および、鶴の森公園となっています。浜田城主田原家の遠祖、俵藤太秀郷にゆかりのものとされる兜鉢(国の重要文化財、写真2ページ)が鶴森神社に残されています。

## 東日野・西日野の大念仏

### 3 [県指定無形民俗文化財]

直径約2メートル、長さ約3メートルの大型の太鼓と直径約1メートルの大型の鉦を使って行われます。現在は8月13日と15日の夜に行われています。



この行事は、鎌倉時代末の1321(元亨元)年に西日野町西明寺での仏道修行を妨げる魔障を禁圧するため、京都東福寺の虎関禅師が祈念したという故事に由来し、悪魔封じとして西日野町と東日野町で行われてきました。

### 4 日永の追分 [県指定記念物(史跡)]

追分とは道が二股に分かれるところで、日永の追分は、京に向かう東海道と伊勢に向かう参宮街道の分岐点にあたります。

現在の追分には、常夜灯、道標、清めの手水所があります。常夜灯のひとつは奉獻時から存在したと推定されます。道標は、1656(明暦2)年に建てられたものが、1849(嘉永2)年に新たな道標を建てた際、追分神明社に移り、さらに明治の神社合祀に伴い、合祀先である日永神社に移されました。それには「京」「山田」「南無阿弥陀仏 専心」「明暦二丙申三月吉日」とあり、東海道に現存する最古の道標です。



### 5 杖衝坂

「笈の小文」で、杖衝坂にさしかかった松尾芭蕉が「歩行ならば杖つき坂を落馬かな(徒歩ならば、杖衝坂を落馬することもなかったらう)」と詠んだ芭蕉の句碑もあります。登りきったところには倭建命ゆかりの血塚社があります。



血塚社

## 天武天皇迹太川御遥拝所跡

### 6 [県指定記念物(史跡)] (写真2ページ 松があった当時の写真)

「天武天皇のろしの松」と呼ばれた樹齢500年を超える老名木と、それを記した1866(慶応2)年建立の石灯籠があり、昭和16年に県指定史跡とされました。残念ながら松は枯死したため、今はマキが植樹されています。



# マップ



## 7 久留倍官衙遺跡 [国指定記念物(史跡)]

奈良時代を中心とした掘立柱建物跡などが多く見つかри、古代の官衙遺跡であると考えられます。

官衙とは、一般に役所や官庁のことを言います。この遺跡では政務を執り行った官衙の中核施設である政庁や、租税として集めた米などを保管した正倉院、その他の関連施設などが確認されています。これらの施設群は、時期と場所を変えて存在していますが、一体で見つかったことは全国的にも珍しいことです。

## 8 聖武天皇社 [市指定記念物(史跡)]

聖武天皇が伊勢に行幸した際、詠まれたのではないかとみられる聖武天皇御製が『万葉集』にあります。「妹に恋ひ吾がの松原見渡せば潮干の渚に鶴鳴き渡る(いとしい人に焦がれて自分が逢うことを待っているという名の松原を見渡すと、潮の引いた遠浅の海に鶴が鳴いてずっと飛んでいくことだ)」。この歌にある松原が、聖武天皇社(松原町)付近だとする説があります。

## 旧東洋紡績株式会社

## 9 富田工場原綿倉庫 [国登録有形文化財]

1917(大正6)年完成の原綿倉庫は、現在、内装を一変させて飲食店などが入り、ショッピングセンターの一角を形成しています。



## 10 萬古神社

1935(昭和10)年創設。境内には四日市萬古の礎を築いた山中忠左衛門の顕彰碑があります。5月中旬の土日には、神社の周りで「萬古まつり」が行われたり、「土鍋供養祭」も行われます。

## 四日市港の変遷

新々町の不動寺(中央小学校の東)はかつて、この門前に阿瀬知川が流れ込み、入り江には四日市港がありました。竜の形をした松に灯明をつけて灯台代わりにした竜灯松は港の目印でした。

17～18世紀、四日市の中心であった東海道と菟野街道が交わる札の辻から浜へ通りができ、港が東海岸に移ると急速に発展し、多くの廻船問屋や干鰯商、漁民の蔵や納屋が立ち並びました。

1873(明治6)年稲葉三右衛門によって始められた修築工事も、1875(明治8)年5月14日に埋立地が完成し、創始者とその夫人の名「たか」にちなみ、稲葉町・高砂町と命名されました。その後、1894(明治27)年の改修工事にて完成した港が、今日見られる旧港の姿になっています。

## 取材を終えて

豊かな歴史が現在の四日市を育ててきたことを感じました。四日市に暮らす皆さんは、誰もこの歴史と無関係ではありません。まちの歴史を知り、私たちのルーツを知って、次世代に四日市の歴史を伝えるのは簡単ではありませんが、今回の広報が少しでも役立てばいいなと思いました。(社会教育課 葛山、博物館 廣瀬、広報広聴課 丹羽)

●この特集についてのお問い合わせ・ご意見は **社会教育課 ☎354-8240 FAX 354-8308**

**博物館 ☎355-2700 FAX 355-2704**

**広報広聴課 ☎354-8244 FAX 354-3974**